

グランドサハラ エクスペディション

～アフリカとは、地球とはなんて広いのだろう～

私はチュニスを出発してから、毎日500キロ、600キロと走った。

ダートを含んで700キロの日もあった。熱射の蜃気楼に向って爆走するエンジンの音しかない世界で体力と気力をすり減らしながら私は思った。

「ああ…なんてことだろう…」

岩山が風化され、想像を絶する時間をかけて一粒の砂になり、その砂を風が舞い上げ、巨大な砂丘を創り出す荘厳な時の流れ、そして人知れずエルグが刻々と大地を移動する時間に比べれば、私たち人間がどんな行為をやり遂げても、大自然にひざまずかねばならないほど、人間は微力なだった。

確固の精神力で臨む陸路の旅も、広大な大陸の空間の中では、弱々しく、このようなものだったかもしれない。

しかし、それゆえに私は地球の広さを知ったのだ。

そしてそこには、情熱という後押しを助けに、身の程知らずの自分が確かに大地と風に交わった証があり、肉体が自然と一体化したような永遠ともいえる至福の時間があった。

忘れていた無雑な精神が甦り、私はいつの間にか自由な空間に放たれた自分に気がついた。

アフリカの旅はそうだったのだ。

そして私は'その地'を知った。

いつの日かまた、日の出とともに出発する日を夢見て…

机上にサハラの砂を置き…

